

## CAS ニューズレター

慶應義塾大学地域研究センター

(Center for Area Studies, Keio University)

No. 119

August 2003

## フォーラム『YAMI 文化研究の一世紀』

——研究の回顧と展望：アジア・太平洋の中の YAMI 文化——

2003年3月15日(土)・16日(日)の両日にわたり、台湾 YAMI 文化研究フォーラム主催の「YAMI 文化研究の一世紀——研究の回顧と展望、アジア・太平洋の中の YAMI 文化」が、慶應義塾大学日吉校舎・来往舎シンポジウムスペースで開催された。本フォーラムは、財団法人・トヨタ財団、財団法人・交流協会、慶應義塾大学地域研究センターの後援を受けて行なわれた。以下はその時の記録である。

「蘭嶼とバタン諸島の民族的関連性——研究史をふりかえって——」

黄 智慧

蘭嶼島の YAMI/TAO 族は目下のところ、近年台湾政府に認定された Thao 族、Kavalan 族をのぞいて、台湾原住民各族の中でも人口数が最も少い一小族である。ただし研究論著の数量から見た場合に、蘭嶼民族学の研究の成果は膨大であり、この点、彼らは台湾原住民各族の中で、疑いの余地なく一大族の地位にある。百余年以来、蓄積された研究成果から見れば、三つの意義上、蘭嶼の民族学研究は台湾の民族学/人類学史上においてトップを占めている：

一、古典民族誌の手本を創る——鳥居龍藏(1870-1953)によって書かれた『紅頭嶼土俗調査報告』(1902)は、台湾原住民各族の中で、最初の民族誌である。さらに

日本民族学界においても、人類学的フィールド・ワークの方法論を踏まえた最初の民族誌である。

二、映像民族誌のさきがけを開く——二十世紀前半の台湾民族史上において、人類学者によって出版された映像民族誌記録は全部で三冊しかなく、その中の二冊は YAMI 族についてである。すなわち鳥居龍藏(1899、『人類学寫真集：紅頭嶼之部』)、及び鹿野忠雄(1945、『An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines, Vol. 1 The Yami』)である。

三、原住民族の対外関係が初めて確認された——台湾民族学史上、最も早く台湾以外の特定の民族の文化的な類縁関係が調査、研究により確認されたのは、蘭嶼とバタン諸島の区域に関する研究成果である。

上記第三項の研究課題が、台湾の民族学研究史が始まった当初から重要な課題の一つとして注目されてきた。近年(1998)になって、YAMI 族自身の強い関心から、バタン諸島を訪問したのがきっかけとなり、お互いの往来交流が実現され、ふたたび両者の比較研究の関心が高まってきた。本稿の目的とは、当該課題の学術史的な整理にあり、今後の研究へ参考として提供できることを期待する。

蘭嶼とバタン諸島の文化類縁性の学術上の模索は、二十世紀前半では二つの時期に集中している。第一期とは

1900年代、二方向より進められた。一方は鳥居龍藏が蘭嶼にてフィールドワークを行った後、彼はフィリピン民族史文献を広く読み、台湾原住民の渉外関係の課題を提出した。もう一方はフィリピンのルソン島、バブヤン諸島、バタン諸島にて言語学民族学のフィールドワークによる研究を行ったドイツの言語学家 Otto Scheerer (1858-1938) である。彼は鳥居龍藏の蘭嶼研究文献をもって対照とし、両地の文化比較研究を行った。

鳥居龍藏は蘭嶼にはほんの二ヶ月余り滞在しただけであったが(1897)、YAMI 族についての研究成果は非常に独特且つ全面的である。彼は当時、全島に八つの村落があるのを見、人口 1200 人(その中 Dimawawo と Ivataishi の二つの村は今日においてすでに存在しない)と記録した。鳥居は史料収集の本領を発揮し、蘭嶼の清朝史料記載、地名等について、先駆的な考証精査作業を全て行っている。民族誌の外の短文の中で、彼は最も早く各村落の古い伝説、とくに朗島、野銀、紅頭各社とバタン諸島住民の往来の口頭伝説を収集記録し、加えていくつかの基礎語彙と風俗習慣の比較を行い、その結果、彼は蘭嶼とバタン諸島の住民は人類学上、同一のグループに属するという結論を得たのだ(鳥居 1902)。YAMI 族の民族特性を把握した後、鳥居は視線をフィリピンの十五世紀の後の史料へと転じた。これら史料を読む時、彼は台湾原住民、特に蘭嶼と常々比較することを忘れなかった。例えば、他が発見したのはいわゆるバブヤン諸島の名称 Babuyan の、その babui とは「猪」の意味であり、この単語は台湾原住民各族及び蘭嶼はみな共通である。彼は曾て嘆いて曰く：「台湾の人類学的調査をなす者にしてフィリッピンのことを知らぬのは学問上実に不忠であります。」(鳥居 1904：608)

一方、Scheerer は、鳥居龍藏の蘭嶼研究文献とアメリカの領事 J. Davidson (1872-1933) 等の見聞記を参照し、蘭嶼の船の雕刻や模様とパプア・ニューギニアの関係について論じた。彼はまた飲酒、吸煙の習慣の差異に注意を向けた。これらはバタン諸島においては非常に早い時期に記録されたが、しかし YAMI 人の習慣には見られない。

この時期、直接にイバヤット島の人と接触し、台湾原住民と広い比較を行ったのは森丑之助(1877-1926)である。1911年7月、イバヤット島からの男女27名の一行が漂流して宜蘭芦頭圍堡大溪庄の海岸にたどり着いた。彼らは台北へと送られ、数日後に淡水より出発し、先に香港を経由した後、マニラへと送還された。森丑之助は彼らが台北にいる期間を利用してインタビューを行い、彼が詳しい台湾各原住民の民族学材料と比較した。体質、言語、土俗、地理観念、伝説のあらゆる項目を比較し、彼も台湾各族の中で、イバヤット島と台湾紅頭嶼の民族が最も類似しているという結論に至った。

こうした研究の後、大正期間には総督府の臨時台湾旧慣調査会によって主導された大規模な原住民習俗の調査事業があり、その中には、全島の各族が含まれていたのであるが、しかし、ただ蘭嶼 YAMI 族のみが欠けていた。その原因は不詳である。

蘭嶼とバタン諸島の関連を課題とした研究の第二期は、台北帝国大学が成立した後から二次大戦が終結するまで(1928年-1945年)に集中している。1929年、台北帝国大学の土俗人種学教室の移川子之藏(1884-1947)が率いる人類学者調査団が、蘭嶼にて短期のフィールド調査を実施した。当時、島上には七つの村落があり、戸数は365戸、人口は1619人であった。この時期の研究は早期の鳥居龍藏の研究成果に立脚し、並びに警察の通訳を通じて獲得された詳細な系譜資料である。移川の推算によれば、イヴァリヌ村の始祖は十四代前に、バタン島よりここに来たのであった。

この外、移川はまた二本のバタン諸島に関する早期の日本漂流者が見聞した記録を探し出した。一篇は1668年江戸時代の尾張国の記録である。この記録は1687年に海賊 Dampier がバタン島に来る前で、近代国家の影響を蒙る前のバタン社会を代表するきわめて貴重な史料である。そのほかの一篇とは1831年に江戸備前国漁民がバタン諸島へと漂着した記録である。文献史料の対比整合によって、移川は両者の間に、体貌から、髪型、禰、女子の腰巻き、衣装、籐笠の帽子等に至るまで、特徴が互いに一致することを見出した。特にその船の名称と大きさも同じであり、玩具の船の製作の伝統まで共通であった。主食も似通っていて、海水によつての煮煮法である。社会組織に関しては、移川は両者が皆温厚な性質で、闘争が非常に少ないことに注目している。社会統治では合議制を採用し、相当に平等である。最後に、語彙の比較上、移川は百近い民俗基礎語彙を比較し、両者の民族的文化的関連性が更に確認された。

鹿野忠雄(1906-1945)は、まだ台北高校に就学中の1928年に蘭嶼島の調査へ赴き、船に関する論文を発表した。東京帝大にて地理学を専攻した後、台湾総督府理蕃課に雇用され、十余年間にわたって、前後十次におよぶ蘭嶼のフィールド・ワークを行った。蘭嶼人の記憶力は極めてよく、当時の彼を知る人は今に至るまで健在であり、彼についてかなりいい印象を持っている(余光弘、董森永 1998)。二次大戦時期には、彼はマニラ科学局博物館の收藏品で両地の比較研究を行った。並びにマニラ市に在住のバタン島移民をインフォーマントとして訪査を行い、高い研究成果を獲得した。彼の観察事項に含まれるのは(1)集落、家屋、(2)衣服、装飾品、(3)農業と家畜の飼育、(4)漁業と船、(5)食物、(6)工芸、(7)季節暦法等、各方面にわたっている。そのほか、彼は博物館の收藏品を利用して、細部まで物質文化の比較材料、及び動

植物の語彙を集計整理した。両地の状況を比較した後、彼は蘭嶼はバタン諸島に比べて更に多くの伝統文化の一部を保存しているという結論を得た。すなわち、バタン諸島の社会変遷の速度は蘭嶼に比較して更に速いということもいえる。

戦後になってこのテーマに取り組んだのは1970年代、角川書店を中心に結成された「黒潮文化の会」である。日本で初めてバタン諸島における現地研究が実施された。当会は野生号Ⅱによってバタン島を出発し、非動力船による黒潮にそった南から北への移動の可能性を実証した。

この会の参加者は人文、自然科学を含めた多岐の分野に広がり、学際的、総合的な研究プロジェクトの先駆けをなし、多くの若手の研究者が養成された。

台湾側の研究者として、最も早くバタン島で調査をはじめたのは徐瀛洲、徐韶諤である。徐瀛洲は戦後からたびたび蘭嶼を訪れ、文物や神話など民族誌的資料を丹念に集めてきた。彼の1983年に出した重要な論文は、鳥居、Scheererの提示した問題に対して、一つ一つ証拠を挙げて検討し、解決へと大きく前進させている。

1990年代、中央研究院によって「台湾與東南亜土著文化血縁關係比較研究」(代表者：許木柱)という研究プロジェクトが進められ、以来蘭嶼と関わって取り組んできたのは自然分野では朱正中、李慧玲、林媽利が、人文分野では余光弘、黄智慧がいる。朱等はHLA-A, B, Cw, DRB1により、蘭嶼とバタンがほぼ同起源かつ蘭嶼がより純潔であること、台湾原住民の中ではプユマが蘭嶼・バタンに最も近いことを実証した。黄智慧は与那国島を中心とした調査をすすめ、環東台湾海文化圏の概念を提示し、蘭嶼・バタン諸島と八重山諸島との関係を視野に入れた研究を模索している。

90年代末になって、「黒潮文化の会」で育った学者の一人、森口恒一が鳥居龍蔵の採集した「ヤミカミ」という表現は実在するもので、またYAMI語はSABTANG島の言語に最も近いことを確認した。彼は300年前のSABTANG島反乱事件によってYAMIに移動してきた移民が現在の蘭嶼の主流になったと推測している(森口恒一1998)。

また画期的な出来事として、近年YAMI族とバタン諸島間の交流が実現された。蘭恩文教基金会、部落振興文教基金会の協力でYAMI族がバタン諸島を訪問(1998, 1999)したのを幕開けに、台北市原住民委員会、フィリピン国会議員、部落振興文教基金会が協力してバタン諸島から蘭嶼への訪問が実現された(2002)。この交流からさらに新しい研究が生まれた。余光弘(2001)は蘭嶼での長いフィールド経験を積んだ後、バタンに行った。その経験をもとにYAMIとバタンの文化の違いに着目した。Dampierなどの残した古い文献史料と照らし合わせ、北上したYAMI文化が変化した原因として、

① 生態環境の変化(蘭嶼の自然資源はより豊か)、② 階級制度を廃止し、貴族社会から平等な社会へ、③ 蘭嶼にいた先住民文化の混入を挙げている。

バタンと蘭嶼の関係というこの研究テーマは100年以上も続いて問われつづけてきた。二十世紀前半期においては、研究者は両方の島嶼で同時にフィールドワークを行ったり、或いは実地考察の確認を行うことはできなかったが、20世紀後半には研究者が両地ともに現地調査することが可能となった。当初からすでに提出されていた両地の密接な文化的関係は、十分に過去の蓄積がなされ、多くの研究者を魅了してきた民族学研究の大きな宝庫である。

今後両地の島民のお互いの往来は、研究者に必ず更に前述資料の検証をさせ、この台湾民族学史上、最も早く発展した対外関係の課題は、更に豊富な理論内容の見解を湧き出すであろう。

#### 参考文献

- Davidson, James W. 1903 *The Island of Formosa, Past and Present*. London; New York: Macmillan.
- Kano, Tadao and Segawa, Kokichi 1956 [1945] *An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines, Vol. 1 The Yami*. Tokyo: Maruzen Company.
- 移川子之藏 1931「紅頭嶼 YAMI 族と南方に列なる比律賓バタンの島々。口碑伝承と事実」『南方土俗』1(1): 15-37.
- オットー・シェアラ著・金子エリカ訳 1983「ルソンー台湾間の列島の民族学について」『えとのす』20: 21-35。(原文 Scheerer, Otto 1906 *Zur Ethnologie der Inselkette zwischen Luzon und Formosa. Mitteilungen d. Gesellschaft f. Natur- und Voelkerkunde Ostasiens. Vol. XI, Part 1*, Tokyo.)
- 鹿野忠雄 1944「紅頭嶼 YAMI 族と飛魚」太平洋協会編『太平洋圏』: 503-573, 東京: 河出書房。
- 鹿野忠雄 1996 [1946, 1952]『東南亞細亞民族学先史学研究』第一卷, 第二卷, 東京: 大空社。
- 黄 智慧 2002「蘭嶼與巴丹群島的文化類縁關係」『南島民族海洋文化論壇』會議論文, 7月5-6日, 台北市原住民事務委員会主催。
- 黄 智慧 2003「失散了的文化鎖鍊——与那国島の玉祭與周圍諸民族」『第九回中琉歴史關係国際シンポ論文集』福建師範大学(近刊)。
- 佐々木高明 1977「二つのバタン島漂流記」pp. 200-228, 黒潮文化の会編『日本民族と黒潮文化』東京: 角川書店。
- 陳 玉美 2001『台東県史: 雅美族篇』台東県政府。
- 鳥居龍蔵 1900a「支那人の紅頭嶼における歴史」『台湾

- 協会会報』26：12-16。
- 鳥居龍蔵 1900b「紅頭嶼地名考」『台湾協会会報』26：7-12。
- 鳥居龍蔵 1902「紅頭嶼土人の古伝」『東洋学芸雑誌』19(244)：44-47。
- 鳥居龍蔵 1904「フィリッピン諸島誌」『鳥居龍蔵全集』11：607-610。朝日新聞社。
- 鳥居龍蔵 1976 [1899]「人類学寫真集：紅頭嶼之部」『鳥居龍蔵全集』11：329-353。東京：朝日新聞社。
- 鳥居龍蔵 1976 [1902]「紅頭嶼土俗調査報告」『鳥居龍蔵全集』11：281-328。東京：朝日新聞社。
- 余 光弘 2002「巴丹伝統文化與雅美文化」『東台湾研究』6：15-45。
- 余 光弘、董 森永 1998『台湾原住民史：雅美族史篇』台湾省文献委員会。

C A S ニュースレター No.119 2003年8月25日発行  
慶應義塾大学・地域研究センター  
発行人 国分 良成  
〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45  
電話 (03) 5427-1598